

最近のラーマヤナ研究より

原 實

Mahābhārata とともにインドの国民的叙事詩として有名な Vālmiki Rāmāyaṇa は1960年から1975年の間に Baroda Critical Edition の刊行を見た。Rāmāyaṇa が今一つの叙事詩に比し量的にみて小さく、又 Mahābhārata の Critical Edition の進行中には第2次世界大戦が介在したとはいえ、Mahābhārata のそれが1933年から1966年という実に33年の長さにわたったのと比較すると、予想外に早く完成したと言いうる。批判的出版に関しては様々な議論があり、これを敢えて忌避する学者もいる程である(例えば、岩本裕博士の邦語訳はボンベイ流布版によっている)が、異なった複数の伝本によって学者がそれぞれ勝手に引用し、議論していた過去の不便を思えば、ここに研究上の一応の手堅い基盤を得たと言う事が出来る。のみならず Mahābhārata と異なって Rāmāyaṇa はアジア諸地域に伝播し、口伝、文献伝承のみならず、彫刻、音楽、舞踊、影絵芝居など芸術百般にわたり、本邦にも影響の跡を留めているから、依るべき Text の確定は、広い分野にわたって客観的研究を推進するのに極めて便利となり、将来に貢献する所大なるものがあると信ずる。

インドの New Delhi に於いて過去二回国際ラーマヤナ学会が開かれたが、1992年の4月13日から17日までイタリアの Torino に於いても International Conference of Vālmiki Rāmāyaṇa と題して国際研究集会が催された。筆者は国際交流基金の資助を得て参加の機会に恵まれ、各国を代表する Rāmāyaṇa 研究者と一堂に会し、研究情報をつぶさに交換する機会を得た。以下に紹介するものはいずれも当学会参加者より筆者に贈られたもので、Vālmiki Rāmāyaṇa の刊本、研究、翻訳の中から一篇づつを選んだ。唯、『翻訳』部(3巻の大冊より成る)の紹介が予想以上に長くなって、全体のバランスを失した事を遺憾とする。

(刊本)

(1) *Vālmiki Rāmāyaṇa, Prof. Gaspare Gorresio's Prefaces to the*

Sanskrit Text, translated from the Italian by Prof. Oscar Botto, Indian Heritage Trust, (Madras 1986), pp. xxvi+1-205.

批評と紹介原
イタリアの生んだ前世紀最大の梵語学者 Gaspare Gorresio (1808-1891) の *Life Work* である *Vālmīki Rāmāyaṇa* の所謂 *Gauda Recension* の校訂は1843-1867の間に出版されたが、その再版がインドより刊行されるのを機に全7巻のイタリア語の序文が纏めて一書となり、しかもすべて英訳された。若くして Paris で E. Burnouf, London で H. H. Wilson に師事した彼は *Rāmāyaṇa*, *Poema Indiano di Vālmīci*, *Testo Sanscrito secondo i Codici Manoscritti della Scuola Gaudana* (1843-1870) 12巻 (1-5巻は Text, 6-10巻はそのイタリア語訳, 11-12巻は最終巻 *Uttara-kāṇḍa* の Text と翻訳) を世に送り、インドの叙事詩研究に一時期を画した。1852年以降は Turin の大学に梵語を教え文字通りイタリア印文学の祖と仰がれていることは周知の通りである (E. Windisch, *Geschichte der Sanscrit Philologie* I, pp. 145 ff.)。もとイタリア語で書かれた全7巻の序文は O. Botto の手によって英訳され、我々にも近づき易いものとなったことは朗報以外の何ものでもない。ここにその労を執られた O. Botto 博士に感謝するとともに、英訳によってこのイタリアの碩学の業績が世界に知られるようになったことを喜ぶ。

本文 (pp. 1-205) に先立つ部分には、遺影、序文等 (pp. 1-xiv) が含まれるが、I. Piavano 女史の手になる Gorresio の伝記と著述目録 (pp. xv-xxiv) は興味深く、且つ貴重である。又、彼の生涯の理解者、援助者であった Carlo Alberto 王への献呈謝辞 (xxv-xxvi) はそれを読む者の心を打つものがある。

周知の如く *Rāmāyaṇa* を最初に西洋に紹介したのは William Carey と Joshua Marshman で、彼ら兩人は1806-1810の間に Serampore より梵文 text を出版した。但しこの出版が二校本を混同して余りにも杜撰且つ無批判的であった事は、20年後 W. von Schlegel と Ch. Lassen の酷評する所となった。Schlegel は所謂 *Recensio commentatorum* を批判的に校訂する間 (1829, 1838) に、Gauda 即ち Bengal Recension が Northern Recension の改作に過ぎず、後者の一系統であると結論した。Lassen もそれに従ったが、Gorresio は Gauda 系の写本 (Paris 2, London 4) を綿密に校合して、Bengal Recension が彼の二人の先輩の予想を裏切って、独立の系統を伝えているものであることを明らかにした。

全7巻の梗概を述べる間に、彼が叙事詩の本質を正確に捉えていた事は注目に値する。昨今、漸く叙事詩研究者の間に常識となった吟遊詩人の口伝の間に起こりうる諸現象も彼の夙に注目していた所であった。既に今か

ら 150 年前にこの記念碑的出版をなした彼の業績を記念して彼の後継として現在 Turin の大学に講筵をはっている O. Botto 主催の下、1992 年 4 月 13—17 日の間に彼のゆかりの地 Turin に於いて Rāmāyaṇa 国際学会が開かれた事は故なしとしない。

(研究)

(2) Ramashraya Sharma, *A Socio-Political Study of the Vālmiki Rāmāyaṇa*, Motilal Banarsidass (Delhi 1986) pp. xxii+1-474.

数ある Rāmāyaṇa 研究書の中でもこの書はなにかんづく注目に値する。その内容の豊富、叙述の平明、常に原典に基づく手堅さ、正確さの故である。著者は現在 Delhi 大学教授で本書はもと彼の学位論文であった。2 部、22 章に分かれ、最後の 23 章は結論、巻末は Bibliography (449-459), Select Index (461-473) によって締め括られる。

第一部は Rāmāyaṇa に描かれる社会生活 (social) を広く 14 章に亘って極めて要領よく論述する。それら諸章は序論に続いて、階層と住期 (varṇa と āśrama), 家族, 結婚, 女性の地位, 教育, 苦行者とその生活, 道德と宗教, 神話, 哲学, 飲食, 衣装, 経済, そして最後に南方の非アリアン人の考察より成る。第二部は政治形態 (political) を 8 章に亘って解説する。ここに国家, 外交, 王, 枢密院, 租税, 法制, 地方行政, 戦争, 軍隊の諸問題が論じられる。

上の内容目次によって知られるように、扱う主題、項目は『社会』『政治』の一般的問題で、古典インドの法典、文学作品、哲学文献、政治論書等がひとしく扱う所であるが、著者はそれらの知識を踏まえて論述を進めている。往時の社会生活、政治形態がどのようなものであったか、その反映を Vālmiki Rāmāyaṇa の中に正確に見ようとするのが著者の意図する所であった。それらが明快に、しかも原典の文献証拠に完全に裏打ちされて提示されている。論述の正確は著者の学問的良心を証し、陳述の平易は背後に深い蘊蓄を想像させるに充分なものがある。

全 22 章は必ずしも均一ではなく、Interstate Relationship を説く第 16 章は僅か 3 頁に留まり、10 頁前後のものが大半であるが、第 22 章の The Art of War and Military Organisation は 53 頁の長きに亘り、第 5 章の Position of Women (pp. 49), 第 9 章 Mythology (pp. 42) がこれに次いでいる。

各巻を解説する事はもとよりここで不可能であるが、例えば Vālmiki Rāmāyaṇa が仏教を知らない事 (p. 4), 哲学思想も Lokāyatika 唯物論以外には論及せず (p. 223 ff.), 『解脱』の意味の mokṣa の語の用例が全

編を通じて皆無である事 (pp. 30 and 149 note) などは興味を喚起するであろう。それらを断言している所に専門家の良心と自信の程を窺い知ることが出来る。哲学、宗教のみならず、いかなる事項についても本書は正確にして信頼しうる Vālmiki Rāmāyaṇa の情報源となっている。

参考文献として挙がっているものはインド人学者の研究書を除くと欧米のそれは戦前のもの (A. Weber, H. Jacobi, E. W. Hopkins) のみで、戦後、特に近年の研究成果、例えば J. Brockington (Righteous Rāma, The Evolution of an Epic, Delhi, Oxford University Press 1984), R. Söhnen (Untersuchungen zur Komposition von Reden und Gesprächen im Rāmāyaṇa, Reinbek 1979), S. A. Srinivasan (Studies in the Rāma Story, On the irretrievable loss of Vālmiki's original and the operation of the received text as seen in some versions of the Vālin-Sugrīva episode, vols. 1-2, Wiesbaden 1984), A. Wurm (Character-Portrayals in the Rāmāyaṇa of Vālmiki, A Systematic Representation, Delhi 1976), L. A. van Daalen (Vālmiki Sanskrit, Leiden 1980), また後述する R. P. Goldman, Sheldon Pollock 等による訳業等、重要な研究には言及する所がない。又原典として利用したものが Baroda Critical Edition でも Bombay Vulgate でもなく、Lahore Edition である事は一見奇異ではあるが、本書が Vālmiki Rāmāyaṇa に関して近年稀にみる原典に基づく優れた研究書である事には疑いを容れない。

(翻訳)

(3) *The Rāmāyaṇa of Vālmiki, An Epic of Ancient India*, Princeton Library of Asian Translations, Princeton University Press, Princeton, New Jersey.

Volume I: *Bālakāṇḍa*, Introduction and Translation by Robert P. Goldman, Annotation by Robert P. Goldman and Sally J. Sutherland, 1984, p. xx+429.

Volume II: *Ayodhyākāṇḍa*, Introduction, Translation, and Annotation by Sheldon I. Pollock* Edited by Robert P. Goldman, 1986. pp. xviii+560.

Volume III: *Aranyakāṇḍa*, Introduction, Translation, and Annotation by Sheldon I. Pollock* Edited by Robert P. Goldman, 1991. pp. xviii+394.

Rāmāyaṇa の全訳は既に幾つかインドより出版されているが、ここに紹介するアメリカ人学者によるものは本稿の冒頭に言及した Baroda Crit-

ical Editionに基づいている。J. A. B. van Buitenenが1965年以来 Ma-hābhārata をその Poona Critical edition より翻訳を企て、その第五巻までシカゴ大学より出版しながら、業半ばにして世を去った事については既に述べた（東洋学報 73, p. 336 ff.）。同じ趣旨に基づいて Rāmāyaṇa の Baroda Critical Edition の完成（1960-1975）を機に、Robert P. Goldman が General Editor となり、California 大学 Berkeley 校に事務所を置き、新版英訳の事業が企画された。元来、B. S. Miller, B. K. Matilal, J. Masson をも含んだメンバーで出発したが、最終的には以下に述べる五人の学者が分担する事となった。第一巻は Robert P. Goldman, 第二、第三巻は Sheldon I. Pollock, 第四巻は Rosalind J. Lefebvre, 第五巻は Robert P. Goldman, 第六巻は Barend A. van Nooten, 第七巻は Sally J. Sutherland と既に翻訳者も決定しているが、1984年以来、1991年までに第三巻まで刊行を見、計画は順調に進行している。

この英訳の企画は一般読者を対象とした唯単なる翻訳ではない。その事実は各巻が翻訳とほぼ同量の注記を含む事によって知られるが、その注記も極めて学問的で、所謂サンスクリット固有名詞の解説の如きは別項 (Glossary of Important Proper Nouns and Epithets) に収められて簡略化されている。第一巻、序論第6章に記される如く、翻訳に際して訳者は常に十指に余る後世の土着注釈文献を参照し、批判版に掲載される異読を検討し、時には批判版の読みをも訂正する。それは飽くまで学者、研究者を対象とし、序論部の解説も時に学術論文の観を呈し、部分的にそれらは専門学者がその解説を読んで、常に必ずしも賛同しかねる程に極めて個人的、独創的見解を提示している。この翻訳が完成した暁にこの企画が Rāmāyaṇa 研究に一時期を画するものとなるであろう事に筆者は疑いをいれない。但し、以下に紹介する所は翻訳、注釈部分には触れず、専ら各巻100頁になんなんとする序論部のみに限っている。何故なら翻訳部の書評には原典を対照せねばならず、尚かなりの時間を必要とする故である。各巻は目次、略語表、緒言、梵語発音案内に始まっているが、各巻の紹介に当たって、先ず全体の構成を述べ、次に序論部 (Introduction) の解説、検討に入る。

第一巻は三部分より成る。第一部は序論 (pp. 3-17)、第二部は翻訳 (pp. 121-269)、第三部は注 (pp. 273-396)。巻末は主要固有名詞解説 (pp. 397-402)、文献目録 (pp. 403-416)、索引 (pp. 417-429) で締め括られる。

第一部序論は6章より成る。第一章は第一巻から第七巻に至る Rāmāyaṇa (以下 R. の略号を用いる) 物語の全体を概観する。第二章 (History and Historicity) は5部に分かれているが、先ず R. 研究史を概観し、特殊問題点に関する諸種の解釈を列举し、次いでこの叙事詩の背景 (Vālmiki and His Sources: the origins of the Rāma story) を論ずる。仏典の Sāketa は Rāma の宮廷, Kosala 国の首都 Ayodhyā に他ならず, Śrāvastī への言及も第7巻に見え, Rāma も仏陀も Ikṣvāku の後裔とされ, 両者の関係も様々に論じられる所であるが、著者は R. の最古部分を仏教興起以前、西暦前6世紀とし、更にその最古部分は Mahābhārata (以下 MBh. と略す) より古いとしている。更に R. の後世インド及びその周辺への影響と変容の問題、そして最後に主人公 Rāma の武士でありながら、自制心の極度に強いその遁世者の性格 (Hero as Renouncer) が論じられる。

第三章は Bāla-kāṇḍa を解説する。一般にこの巻は第7巻と共に R. の中核部 (2-6巻) をなさず、後世の追加であるとされるが、幾つかの伝説、神話部分を除けば Bāla-kāṇḍa の総てが所謂中核部と無関係であるとは言えない。ここに中核部と関連ある部分が分析研究の対象となる。著者は本巻に述べられる所を幾つかの部分に分解して、Bāla-kāṇḍa それ自体に新古の層があり、全体を安易に一概に纏めて論ずる事を戒める。以上の三章は R. P. Goldmann の執筆である。

第四章 (The Rāmāyaṇa Text and the Critical Edition) は Sheldon I. Pollock, 第五章 (Translating the Rāmāyaṇa) は Leonard E. Nathan の執筆である。この中、第四章は R. の南北二伝本を中心とする伝承形態、写本の校合による批判的出版の必要性と、同時にその限界、研究者がこの批判版を如何にして使うべきか、その利用の心得を述べる。第五章は古代インド叙事詩を現代英語に翻訳する際の困難と限界を述べるが、これは翻訳一般に通じる問題でもある。言語のみならず、風俗習慣の相違、更に該当テキストが特定民族の信仰心を鼓舞する性質のものである場合、それを外国語に翻案する事は凡そ不可能に近い。

それに連関して第六章『訳注』が執筆される。注記の豊富な事はこの企画の特徴で、一般読者のための注を省略し、より多くの部分を学者研究者のために割いている事は上に述べた通りである。量的に見ても翻訳148ページに対し、注は細字123ページを占めている。又ホメロスとヴァールミーキの文体の相違 (簡略と冗長、直截と誇張) を論じる部分も極めて興味深い。唯、von Glasenapp, *Zwei philosophische Rāmāyaṇa*, 又 D. Schlingloff, *Altindische Stadt* への参照がないのは不思議であり、又 pp. 19, 77

の *niyojana* は *niyoga* の誤りであろう。

第二巻は序論 (pp. 3-76), 翻訳 (pp. 79-324), 注記 (pp. 327-527) の三部分より成る。巻末は固有名詞解説 (pp. 529-531), 批判版訂正表 (pp. 533-534), 文献目録 (pp. 535-548), 索引 (pp. 549-560) によって締め括られる。

序論部は11章より成る。第一章は次巻『森林の巻』との対蹠に於いて本巻が古代インドの『都市』『宮廷』生活を描いている事実, 第二章は本巻の内容を簡単に概観する。

第三章 (The Central Issues) は, 後期ヴェーダ時代に於ける王権の確立と, その世襲制の必然的所産である兄弟間の王位継承にまつわる角逐, そしてそれが二大叙事詩の主題をなして来た歴史的事情を論ずる。但し, Vālmiki はそれを猿, 羅刹の間にのみ見ようとし, 人間社会に有ってはならぬ事として Rāma 兄弟を描き出し, 王族はすべからく『和を以て貴して為し』, 臣民をわが子の如く慈しむべき事を教えている。そしてその精神は Aśoka 王の『法に基づく支配』に通じるとしている。

第四章は rājya-sūka にまつわる問題, 第五章は哲学, 人為と運命, 更に業の問題を扱う。第六章 (美的, 文学史的) は R. と他の文献との関係 (Taittirīya 派と Vālmiki), 法典, Jātaka (540, 513), MBh. なかんずくその第二巻 (Sabhā-parvan) と本巻との類似に言及した後, Vālmiki のそれ以前の作品に見られぬ特徴, 即ち彼の獨創性, その文学的資質 (優雅, 洗練) を浮き彫りにする。

第七章 (The Characters) は登場人物の中に感情を露にする者と感情を抑えるものを二大別し, 後者を称揚する所に作者の教訓的意図を見ようとする。その中から特に『女性』『十車王』『ラーマ』を取り上げ, それが 8, 9, 10章の主題を構成している。

第八章は Kausalyā, Sitā, Kaikeyī を扱い, 『女の三従』の最古形が Vālmiki によって示されている (2.55.18) にもかかわらず, 実際は理論より掛け離れて夫に逆らう女性三態を描き出す。但し, Vālmiki はその様な女性の行動をむしろ『女の自立』のもたらす危険の例証としていると著者は解釈する。

第九章の著者の Daśaratha 王解釈は示唆に富む。王は元来清廉潔白な人ではなく, 性欲に駆られて若き Kaikeyī に安請合いし, Rāma の悲劇をもたらした。しかし吟遊詩人は王を理想化せねばならない。この王の弱点を隠蔽する為に Vālmiki の利用したものの一つに Sāma-jātaka があるとする (2.57-58)。従って, しばしば論じられる R. 57 とこの Jātaka と

のパラレルは Jātaka の方がより古いと著者は考えている。

第十章は Rāma を扱う。クシャトリヤにしては世評を恐れ、来世を恐れ (para-loka), 武士道を厭い、不殺生を勧め、バラモン隠遁者の性格を具える Rāma の描出に文武両道を兼ね備えた理想王の姿を見、ここに仏伝の先駆、Aśoka 王との類似を見ようとする。但し、A. Wurm の書が参照されないのは何故であろうか。

第十一章 (原典、注解、翻訳) は Baroda 批判版の功罪を論じ、翻訳は必ずしもそれに拠らない事を明言し、その際には注解に根拠を示し、かつ写本の証拠を明示すると言う。古典の解釈の分かれる所以で、そのいずれを取るかはもとより各研究者の見識と裁量によるであろう。

第三巻も三部分より成る。第一部序論 (pp. 3-84), 第二部翻訳 (pp. 87-244), 第三部注記 (pp. 247-357)。巻末は固有名詞解説 (pp. 359-362), 批判版訂正表 (pp. 363-364), 文献目録 (pp. 365-377), 索引 (pp. 379-394) によって締め括られる。

第二巻の宮廷、都市生活より一変して舞台は森林となり、悪魔が跳梁し、猿が登場する。Pali Dasaratha Jātaka はこの森林部分を欠く故に、一時は本巻は本来の叙事詩部分を形成しないものと考えられていた。反面この巻より 6 巻に至る愛妻 Sītā の誘拐、誘拐者征伐、愛妻奪還は西洋の騎士物語に類似している為に、研究の当初から様々な解釈を生んだ。それら研究史の概略は序論 1—3 章に述べられる。

第 4—6 章は著者既刊の 3 論文 (JAOS 104, 1984, WZKS 29, 1985, IT 13, 1985-6) の改訂版で、第二巻のように新たに書き下ろしたものではない。

周知の通り叙事詩の主人公 Rāma は Viṣṇu 神の化身とされるが、通常この思想は後世の追加部分 (第 1 及び第 7 巻) に顕著であるとされる。しかし Rāma の神性を証す章句は R. の中核部に皆無とは言えない。著者はそれらを丹念に蒐集して英雄 Rāma の神性は叙事詩本来のものと考えた。『人間にして且つ神』である『化身』(avatāra) の問題を『神』の側面と『人間』の側面から論じたものが第 4—5 章である。

第 4 章は Rāma の『神人』の神的側面を説く。Rāvaṇa が梵天より vara を得た話はこの叙事詩に繰り返し語られるが、一切のものよりの不可殺の中に『人間』を入れなかった事に Viṣṇu が人間に化身する必然性が暗示されている。インドの王権神授説 (Divinity of King) の問題と関連させつつ、著者は Rāma の『神性』は後世追加部分に限らず、その真正部分に本来的であったと主張している。

第5章は Rāma の人間的側面を説く。不動心、恩愛を特徴とする Rāma が愛妻の誘拐に遇って自制心を失い、憤怒狂乱状態になるのは何故か。神の化身として相応しくない。英雄の狂乱は世界のどこの文学にも見える所であるが、著者はここに人間 Rāma を見、『神人』(avatāra) の人間的側面を見ようとする。同時に Rudra 要素の顕現をここに見ようとするが、この神は怒っても自ら狂うかどうか問題であろう。

第6章は Rākṣasa を扱う。Rāma の敵対者であった羅刹が何者であったか。彼らをアーリヤ社会の圏外に位した原住民 (Dravidians)、シンハラに拠る仏教徒となす等、古来説はまちまちであった。著者は先ず森の深みに単独で住む羅刹 Virādha, Kabandha を記述してから、それらとは凡そ趣を異にする Laṅkā 島の Rāvaṇa 以下の羅刹の特徴を説く。彼らは、その暴力、変身術 (kāmarūpin), 色魔性を除けば、全く Ayodhyā の住民のコピーに過ぎず、Laṅkā 島の記述も Ayodhyā のそれと選ぶ所がない。その暴力はなканずくバラモン苦行者に向けられるが、過剰性欲は Sītā の誘拐に結果すると言う。そして著者は彼らをアーリヤ人の魅惑 (fascination) と拒絶 (replulsion) の心理の所産と結論する。

資料を蒐集してそれらより可能な新しい解釈を導き出すのは文献学者の仕事であり、訳者の態度もその限りでは非難の余地はない。しかし、それを採るか否かはそれぞれの研究者の判断による。これはまさに古典の解釈の様々なに分かれる所以であるが、訳者の解釈もその意味で多くの問題を将来に残していると言うべきであろう。